

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”審査会次第

日時：平成29年10月31日(火)
10:00～12:00
場所：旧三井家下鴨別邸

1 開会

2 挨拶

3 議事

- ・市民アンケートの最終結果の報告
- ・“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の年中行事」の検討
- ・普及啓発冊子について

4 閉会

【配布資料】

- ①次 第
- ②名 簿
- ③配席図
- ④資 料

資料1	市民アンケート最終結果
資料2	選定案
資料3	普及啓発冊子 案
資料4	スケジュール
参考資料	第1回審査会摘録

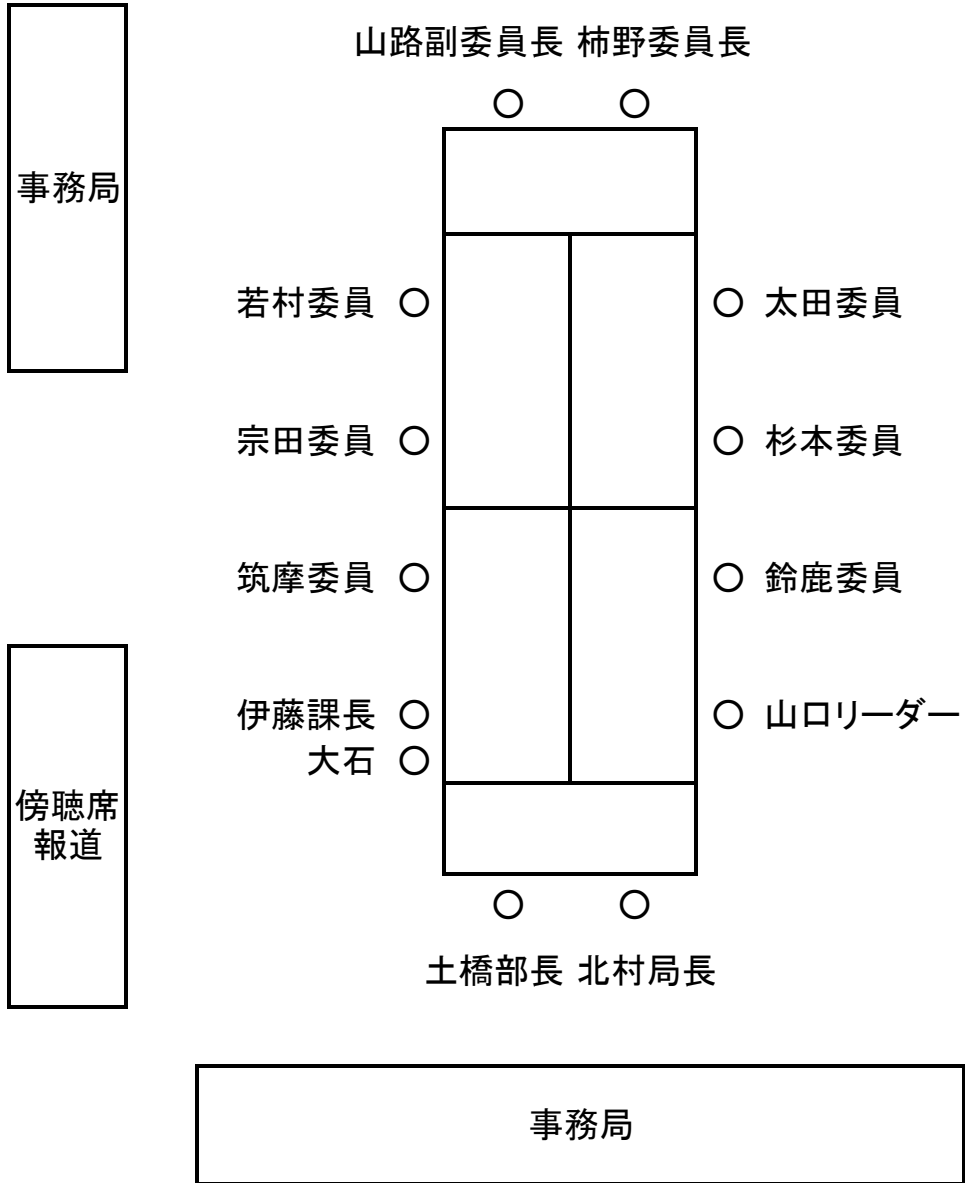
“京都をつなぐ無形文化遺産”審査会委員名簿

(五十音順, 敬称略)

	氏 名	肩 書
委員	太田 達	(公財) 有斐斎弘道館代表理事
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長
委員	杉本 歌子	(公財) 奈良屋記念杉本家保存会学芸部長
委員	鈴鹿 可奈子	(株) 聖護院八ッ橋総本店専務取締役
委員	筑摩 寿	市民公募委員
委員	宗田 好史	京都府立大学副学長・京都和食文化研究センター長
委員	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員
委員	若村 亮	(株) らくたび代表取締役
オブザーバー	山口 壮八	文化庁地域文化創生本部 暮らしの文化・アートグループリーダー

第2回京都をつなぐ無形文化遺産審査会配席図

平成29年10月31日
旧三井家下鴨別邸



「京の年中行事」に関するアンケート

京都には、世代を越えて暮らしの中で伝えられてきた数多くの無形文化遺産があります。それらの価値を再発見、再認識し、大切に引き継いでいこうという気運を盛り上げるため、平成25年4月、京都市独自の仕組み“京都をつなぐ無形文化遺産”制度を創設し、これまでに「京の食文化」、「京・花街の文化」、「京の地蔵盆」、「京のきもの文化」、「京の菓子文化」の5件を選定しました。

この度、季節感を実感でき、家族や地域のつながりを深める重要な役割を果たしてきた「京の年中行事」を6件目の選定対象として検討することとしました。

ついては、市民の皆様の暮らしの中の年中行事について、以下のアンケートを実施しますので、御協力よろしくようお願い申し上げます。

◆ 募集期間

平成29年6月5日(月)～平成29年8月31日(木)【必着】

◆ 応募方法

郵送、ファックス又は電子メールにより応募してください。

京都をつなぐ無形文化遺産ホームページ (kyo-tsunagu.net) から御応募いただけます。

なお、提出いただいた書類は返却いたしませんので、御了承願います。



◆ 御意見の取扱い

この意見募集で収集した個人情報につきましては、「京都市個人情報保護条例」に基づき適切に取り扱い、他の目的に利用することは一切ありません。

なお、御意見に対する個別の回答はいたしませんので、あらかじめ御了承願います。

◆ 問合せ先及び応募先

〒604-8006

京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2階

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

電話：(075) 366-1498 / FAX：(075) 213-3366

電子メール：bunka-hogo@city.kyoto.lg.jp



京都市
CITY OF KYOTO

発行：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 平成29年6月

京都市印刷物第294244号



年中行事とは、毎年特定の時期に家庭や地域等で行われる行事です。年中行事を行う日は「ハレの日」と呼び、日常である「ケの日」と分けて、一年の暮らしの中にリズムをつくってきました。

<年中行事の例>

正月、七草、初午、節分、上巳の節句（雛祭り）、端午の節句、夏越、七夕、お盆、地藏盆、十五夜、亥の子、七五三、年越し、祭り、二十四節気など

以下について、御記入ください。

(1) あなたが大切にしたい、家庭や地域で引き継がれてきた「年中行事」を教えてください。

行事名	どういったことを行いますか？
(例) 正月	白味噌丸餅のお雑煮を食べる。

(2) 「年中行事」を大切だと思う理由であてはまるものに「○」をつけてください。(複数可)

- a 伝統や風習を大切にしたいから
- b 季節を感じられるから
- c 暮らしにメリハリがつくから
- d 祈願や感謝等の行事の意義が大切だから
- e 地域の結びつきを深めるから
- f 親族や友人が集まる機会になるから
- g 行事特有の食文化等もあるから
- h 地域への愛着や誇りを育むから
- i 特に理由はないが慣習なので
- j その他

[]

(3) 「年中行事」を継承していくための普及啓発のアイデア、その他御意見等を自由に御記入ください。

まとめる際の参考としますので、差し支えなければ当てはまる項目に○を御記入ください。

【性別】 男性 女性

【年齢】 20歳未満 20歳代 30歳代 40歳代
50歳代 60歳代 70歳以上

【お住まい等】 京都市在住 京都市通勤・通学（京都市在住除く） その他

市民への年中行事アンケートの結果

1 市民アンケートの概要

(1) 募集期間

平成29年6月5日（月）～平成29年8月31日（木）

(2) アンケート数等

アンケート数：764人，意見数：3,977件

(3) アンケートに答えていただいた方の属性

ア 居住地等（人）

京都市在住	京都市通勤・通学	その他	不明	合計
692	38	13	21	764

イ 年齢（人）

20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	不明	合計
65	172	119	139	115	105	35	14	764

ウ 性別（人）

男性	女性	不明	合計
338	413	13	764

2 市民アンケートの内容

Q1 あなたが大切にしたい、家庭や地域で引き継がれてきた「年中行事」を教えてください。

行事等	件数	主な行動等
正月（初詣）	440	初詣，白味噌丸餅の雑煮を食べる，すまし汁丸餅雑煮を食べる，おせち料理を食べる，家族で集まる，お年玉，書初め
盆	154	墓参り，先祖を偲ぶ，御精霊さんを迎える・送る，家族・親戚で集まる
節分	140	太巻き（恵方巻き）を食べる，豆まき，お札を納める，イワシを食べる
大晦日（年越し）	135	年越しそばを食べる，除夜の鐘を聴く，をけら詣り，大掃除
地蔵盆	100	町内行事として参加する，地蔵を飾る，数珠回し，ゲームを行う，子どもがお菓子をもらう，ふごおろし
上巳の節句（桃の節句，ひな祭り）	60	ひな人形を飾る，桃の枝を供える，ちらし寿司を食べる，ひなあられを食べる
七草	53	七草粥を食べる
夏越の祓	53	水無月を食べる，茅の輪くぐり，鱧・芋茎を食べる
祇園祭	41	巡行見学，鉾見学，浴衣を着て宵山等に参加する，粽を飾る
祭り（夏祭り・秋祭り）	39	屋台で食べる・ゲームをする，浴衣を着る，地域の祭りに参加する

端午の節句 (子供の日)	2 7	兜飾り・大将人形・白馬などを飾る，柏餅・ちまきを食べる 鯉のぼりを立てる
七夕	2 5	笹飾り，短冊に願い事を書く
クリスマス	2 3	ケーキ・鳥料理を食べる，プレゼントを贈る
五山送り火	1 6	送り火を見る
誕生日	1 6	ケーキを食べる，プレゼントを贈る・貰う，家族で集まる
冬至	1 0	柚子湯に入る，カボチャを食べる
土用の丑	9	ウナギを食べる
彼岸	8	墓参り
七五三	8	子の成長祈願
十五夜	6	月見をする，団子を食べる，すすき・秋の花を飾る
葵祭	6	鯖寿司を食べる，行列見物
小正月	5	小豆粥を食べる，ぜんざいを炊く
御手洗祭	4	下鴨神社で水に足をつける，みたらし団子を食べる
どんど(とんど)焼き	4	古くなったお札等を焚き上げる
運動会(学区 民体育祭)	3	運動会に参加する
花見	2	宴会，桜を囲む
二十四節気	2	見舞状を送る，お墓参り，季節にあったものを食べる
四季折々	2	季節ごとの和菓子を食べる
その他	7 4 (各1)	亥の子餅，事始め，新年会，海の日，御挨拶，新年互礼会，海の日，六斎念仏，十三まいり，東寺弘法市，本願寺と平野神社お参り，高田太鼓踊り，統一夏祭り，新年会，松尾大社の御旅，春日祭り，やすらい祭り，四季折々，東灘だんじり祭り，氏神様のお祭り，水の祭典，をけら詣り，若宮(社)祭り，鬼火炊き，洛西ふれあいの里秋祭り，花札，夏始め，結婚記念日，夜市，氏神の祭礼，雨水，花祭り，光秀祭，ラジオ体操(7・8月)，納涼床，六道まいり，高齢者茶話会，母の日，焼肉会，法事，榎ノ宮祭礼，足つけ神事，晴明神社・今宮神社の祭，一言寺祭，亀岡祭，獅子舞，茶道，神社参拝，通過儀礼，醍醐寺市，祭礼，こどもみこし祭り，花火大会，花祭り，節句，夏至，初午，大寒，餅つき，仲秋の名月，梅花祭，お参り，御用納め，御用始め，能楽大連吟，いちろく市，敬老の日，きもの日，DO YOU KYOTO?デー，京都マラソン，京都学生祭典
合計	1, 465	

Q2 「年中行事」を大切だと思う理由であてはまるものに「○」をつけてください。

a	伝統や風習を大切にしたいから	4 4 9
b	季節を感じられるから	4 2 9
c	暮らしにメリハリがつくから	2 0 1
d	祈願や感謝等の行事の意義が大切だから	1 7 4
e	地域の結びつきを深めるから	1 2 2
f	親族や友人が集まる機会になるから	2 4 8
g	行事特有の食文化等もあるから	1 9 6
h	地域への愛着や誇りを育むから	1 2 0
i	特に理由はないが慣習なので	7 9
j	その他 (※)	2 0
総数		2, 0 3 8

(※)「j その他」の御意見

- ・ 世の中、昔に比べて人付き合いが減っていると思います。家族や親戚が集まったり、人と交流する機会としても大事な時間だから。
- ・ みんな何かしら行事に関することをやっていて、やらない方がおかしいと思ってしまう。
- ・ 家族が代々受け継いできたから
- ・ 子供たちに伝えていくから
- ・ 家族への感謝のために
- ・ 家族の絆を感じる
- ・ 楽しいから
- ・ ない。あるのが羨ましい
- ・ 特に大切だとは思っていない
- ・ 特別に行う事はない
- ・ 行事を気にしない
- ・ 当然のように息をしている感覚で執り行える行事であってほしい
- ・ 家族の無病息災を祈る
- ・ 文化の継承

Q3 「年中行事」を継承していくための普及啓発のアイデア，その他の御意見等を自由に御記入ください。

- ・ イベントを実施する
- ・ 行事に詳しい高齢者の話を聞く
- ・ 参加しやすい雰囲気づくり
- ・ TV・CM等のメディアを活用して発信する
- ・ SNSを活用して発信する
- ・ スーパーで行事食を販売する
- ・ 職場，学校で啓蒙する
- ・ 古いしきたりだけでなく新しい楽しみ方を常に取り入れる
- ・ 小学校の給食で出したり，授業に取り入れたりする
- ・ 特別休暇を設定する
- ・ 地域コミュニティの強化，行事の本当の意義を知る機会を持つ
- ・ 出来る範囲で実行していく
- ・ 現代の暮らしに取り入れやすいかたちにする
- ・ 冊子や掲示など目につく形でまずは知ってもらうことが必要
- ・ 子どもたちに習慣として身に付けさせる
- ・ 体験させる
- ・ 伝統を守るのがカッコイイという空気をつくる
- ・ 地元企業、商店街、商業施設との提携やイベントの実施
- ・ 1，2人分など小量で行事用の食べ物を売る
- ・ 年中行事を紹介するVTRを作成する
- ・ 有職故実を簡単に解き明かした勉強会の開催
- ・ アプリでお知らせする
- ・ 年中行事のパズルやカルタを作る
- ・ 行事のスケジュール帳等を地域に配る
- ・ 堅苦しく華やかではないイメージのため，現代向けにもわかりやすく楽しいイメージを定着させるべき（幼児向けに漫画で解説する）
- ・ 担い手の高齢化，人手不足が深刻であるため学生の参加・協力を求めていくべき

京都をつなぐ無形文化遺産

京の年中行事

～季節・暮らし・まちを彩る伝統行事～

(案)

目次

【選定にあたって】	1
【京都を彩る年中行事】	3
1 季節を彩る年中行事	3
2 暮らし・まちを彩る年中行事	4
【移り行く年中行事】	6
1 改暦と年中行事	6
2 生活の変化と年中行事	6
(参考)	
【暮らしの中で継承していきたい年中行事の例】	8

【選定にあたって】

年中行事とは、毎年特定の時期に、家庭や地域などで繰り返し行われる伝統行事のことで、神仏や自然に対する畏怖や祈り、感謝、先祖を敬い、故人をしのぶ気持ち、子どもの健全な成長を願う気持ち、生業や生活の向上を祈る気持ちなどを契機に生まれた。

年中行事には、お盆など日本の民俗に根差したもの、五節句など中国から伝わったもの、祭礼に伴うものなどがあり、それぞれにまつわる食べ物やしつらい、しきたりなどを伴いながら、暮らしの中で育まれてきた。

とりわけ千年の都・京都では、公家、武家、僧侶と庶民が交わった歴史が長く、加えて同業者同士のつながりが密接であったことから、独自の行事やしきたりが日常生活に定着し、豊かな生活文化が育まれてきた。

正月や五節句のように公家や武家の儀式からきているものや、節分や彼岸のように暮らしに深くかかわる雑節から生まれたものなど、様々な年中行事に彩られる暮らしの中、人々は、普段通りの日常を「ケ」の日、祭礼や年中行事などを行う日を「ハレ」の日と呼び、単調になりがちな生活にリズムをつけてきた。

日々の暮らしの中で、楽しみや安らぎをもたらしてきた年中行事は、無病息災を祈り、神仏や自然への畏敬の念を深めることを通じて人々の心を豊かにするとともに、家族とのふれあいを深め、さらに、地域コミュニティの活性化にも役立っている。

このように人々の生活に欠かせない年中行事は、時代の変化に応じ、形を変えながらも大切に受け継がれてきた。太陽暦へ改暦された明治初期以降、多くの年中行事が混乱を極めた時期があったが、人々は様々な工夫をしながら年中行事をつないできた。

現在、経済性、合理性を追求する生活スタイルや核家族化、地域におけるつながりの希薄化などにより、年中行事は衰退、或いは、簡素化されるなど、大きく変化している。

また、きものなどの伝統的衣装や装飾品など、京都の伝統工芸は年中行事と密接に結びついており、年中行事の継承は伝統産業の将来にも大きく関わっている。

先人が長い歴史の中で培ってきた伝統文化を次の世代に伝えていくことは、現代に生きる私たちの役割である一方、暮らしに寄り添う生活文化は時代とともに変化していくものでもある。

年中行事についても、形だけではなく、行事本来の意味、それらの中に込められた先人の思いや知恵というものを引き継いでいく必要があり、現代において実施できるものは実施し、なじまないものは現代の生活に合った形で取り入れていく、そういう柔軟な方法で年中行事を守り、伝えていくことが大切である。

さらに、伝統文化に対する関心が薄らいでいる今日、年中行事をめぐる問題は、行事そのものの問題だけではなく京都の文化全体の問題としてとらえる必要がある。

世代を越えて大切に受け継がれてきた京都の無形文化遺産として、これまで「京の食文化」「京・花街の文化」「京の地蔵盆」「京のきもの文化」「京の菓子文化」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定してきた。そして、私たちは、移り行く季節の中で行われる様々な行事の際にこれらの文化に触れ、その体験を通じて伝統文化を継承していく意義を強く認識することができる。

こうした状況を踏まえ、伝統文化に親しみ、生活文化を継承していくよい機会となっている年中行事の価値を見つめ直し、継承していく大切さを再認識するとともに、その意義を広く発信していくために、「京の年中行事～季節・暮らし・まちを彩る年中行事～」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

【京都を彩る年中行事】

1 季節を彩る年中行事

私たちの暮らしを彩る年中行事の代表的なものに「節句」がある。「節」は季節の節目を意味し、「節句」とは、季節の節目に、無病息災、豊作、子孫繁栄などを願い、お供え物をしたり、邪気を祓う行事のことで、「節供」ともいう。

人日^{じんじつ}(1月7日)、上巳^{じょうし}(3月3日)、端午^{たんご}(5月5日)、七夕^{たなばた}(7月7日)、重陽^{ちょうよう}(9月9日)の5つを**五節句**※といい、古代中国では、奇数(陽)の重なる日は、めでたい反面、陰に転じやすいとされ、邪気を払う行事が行われてきた。

こうした中国の暦法と風習が日本に伝わると、日本古来の儀礼や祭礼などと結びつき、宮中で邪気を祓う行事が催されるようになった。

当初は宮中や貴族社会で行われていたが、江戸時代に「五節供」が式日(現在の祝日)に制定されてから、民間に広がっていった。明治になって「五節供」は廃止されたが、今でも私たちの暮らしの中に定着している。

五節句のほかに季節の節目として**二十四節気**がある。太陽の黄道上^{こうどう}の視位置によって15度ごとに24等分し、約15日ごとに分けた季節のことである。1年の長さが12の「中気」と12の「節気」に分類され、**立春**や**秋分**、**冬至**など、季節を表す名前がつけられている。

古代中国では、月の満ち欠けに基づいた太陰暦が使われていたが、太陰暦は太陽の位置と無関係なため季節の間にズレが生じていた。農作業などでは春夏秋冬の季節を正しく知る必要があるため、中国の戦国時代に太陽の動きを基に二十四節気^{せうせつき}が考案され、日本では江戸時代の暦から使われている。とりわけ三方を緑豊かな山々に囲まれ、鮮やかに季節が移ろう京都では、二十四節気によって、豊かな自然を暮らしに織り込み、共に生きる暮らしの文化を培ってきた。

二十四節気のほか、**節分**や**彼岸**など、季節の移り変わりを表す**雑節**がある。これは生活や農作業に照らし合わせてつくられた日本独自のもので、いまでも暮らしの中に溶け込んでいる。

※五節句

人日：古代中国では、正月元旦は鶏、2日は狗（犬）、3日は羊、4日は猪、5日は牛、6日は馬、7日は人の日として、それぞれの吉凶を占い、7日の人の日には邪気を祓うために、七草の入った粥を食べ、一年の無病息災を祈ったとされる。

上巳：古代中国では、上巳の日に、川で身を清め、不浄を祓った後に宴を催す習慣があった。一方、日本の貴族社会では、「雛遊び^{ひいなあそび}」というものがあり、両方の習慣が結びついて、男女一對の「ひな人形」に子どもの幸せを託し、ひな人形に厄を引き受けてもらい、健やかな成長を願うようになった。なお、京都では、古式に倣い、男雛を向かって右、女雛をその左に並べるのがならわしとされる。

端午：中国では、この時期は雨季にあたり、盛りを迎える香り高い菖蒲^{しょうぶ}や蓬^{よもぎ}が邪気を祓うとされたことから、蓬で作った人形を軒に飾ったり、菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に浸かって邪気祓い^{ひとがた}をしていた。平安時代に宮中に取り入れられ、江戸時代になると、菖蒲が武を尊ぶ尚武^{しょうぶ}に通じることから、武家の行事となり、さらに男児の健やかな成育を祝う行事へと発展した。

七夕：中国に古くから伝わる、牽牛星^{けんぎゅうせい}（わし座のアルタイル）、織女星^{しょくじょせい}（こと座のベガ）の伝説に基づいた星祭りの説話と日本古来の農耕儀礼や祖霊信仰と結びついたりと言われる。竹竿に糸をかけて裁縫や習字の上達を星に祈るとかなえられるという、中国の乞巧奠^{きっこうでん}の習わしがあり、平安貴族たちが、これをまねて、梶の葉に歌を書いたのが始まりとされ、京都の旧家ではその伝統が残っている。

重陽：「九」という陽の数が重なることから重陽という。中国では奇数を陽の数とし、陽の極である9が重なる9月9日は大変めでたい日とされ、菊酒を飲んだりして邪気を払い長命を願うという風習があった。平安時代の初めに日本に伝わり、宮中では観菊の宴が催された。日本独自の風習に「菊の着綿^{きせわた}」があるが、平安時代から宮中で営まれたもので、重陽の節句前夜、菊の花の上に真綿をかぶせると翌朝には夜露と菊の香りが染み込み、その真綿で身体を祓い無病息災と不老長寿を願ったのもので、京都を中心に伝承されてきた。

2 暮らし・まちを彩る年中行事

京都には、五節句や二十四節気、雑節にまつわる行事のほか、一年を通じ、家庭や地域、社寺など、まちのいたるところで様々な年中行事が行われている。いずれの行事にも深い意味が込められ、人それぞれに願いを込めて行事に参加する。

1年が始まる**正月**には、過ぎ去った年の災厄を祓い、新たな年の幸せを願う。旧暦の年越しとなる**節分**には、宮中で行われていた**追儺**^{ついな}という鬼払いの儀式があり、民間では豆まきをして厄を祓う。6月と12月の末日には、半年の厄を祓い、次の半年を無病息災で過ごせるように祈願する**大祓**^{おおはらえ}がある。

京都の代表的な祭りである**祇園祭**は、京都をはじめ日本各地に疫病が流行したとき、災厄の除去を祈った御霊会^{ごりょうえ}を起源とする。また、数多くの大火を経験した京都では火伏せ信仰が広がり、7月晦日夜から翌朝にかけての愛宕山は千日分の功德があるとされる**千日詣**を行う参拝者で賑わう。一方、太陽の光が最も弱くなる冬至の頃になると、古代から続く太陽復活の行事とされ、無病息災などを祈る**お火焚き**が町々や各神社で行われる。

春秋の**彼岸**に先祖の霊を供養するとともに、**盆**には先祖の霊をお迎えし供養した後、**五山の送り火**に手を合わせて先祖の霊を送り、冥福と家内の無病息災を祈る。盆が過ぎると子どもの健全な育成と町内安全を願って各町内で**地藏盆**が行われる。子どもの健やかな成長を祈る行事としては、人生儀礼として行う**七五三**や**十三詣り**もある。

社寺の多い京都には当然**縁日**も多く、**天神さん**や**弘法さん**をはじめ、境内や門前で開かれる**市**^{いち}は多くの参拝者で賑わう。また、長らく日本の政治・宗教・文化の中心であったことから、**葵祭**や**新嘗祭**^{にいなめ}など五穀豊穡や国家安泰を願う行事も多く、また、茶道などの伝統文化と結びつき、**献茶祭**などの祭事も催される。さらに、平安京遷都千百年の奉祝行事として始められた**時代祭**は、いまでは京都三大祭とされている。

人々はこうした年中行事に参加し、家族や友人、地域の人々と毎年同じ時期に同じような経験を共有することで、家族や地域などの絆を深め、それぞれの人生を豊かにしていると言える。

【移り行く年中行事】

1 改暦と年中行事

明治5年（1872）にいわゆる明治改暦が行われた。旧暦または陰暦と呼ばれる、太陰太陽暦（太陰暦を基とするが、太陽の動きも参考にして閏月を入れ、月日を定める暦法のこと）に替わって、太陽暦が採用された。

旧暦からの伝統を、新暦のなかでどう行っていくのかは、年中行事にとって大きなテーマであり、葛藤が続いたが、いろいろな工夫を重ねた結果が現在の年中行事である。

具体的には、新暦への移行により、季節が約1か月早くなるため、年中行事が本来の季節からずれてしまい、その時期に行う意味が薄れてしまうものが多数存在した。そこで、暦の上での日付を1か月遅らせることにより、旧暦の時代の季節から大きくずれないようにする方法、つまり月遅れとしたものが多い。月遅れの代表的なものにお盆があり、旧暦7月15日のお盆は、京都でも月遅れの8月15日に行われる。

一方、五節句などの日付に意義がある行事では月遅れはほとんど採用されず、時期が大きくずれた状態になっている。端午にちなむこいのぼりは、元来梅雨の季節である旧暦5月、雨中で鯉が天に昇って竜になること（登竜門）にあやかっ、江戸時代に武士の子弟の出世を願って掲げたものであった。また、七夕は元来梅雨明け後の旧暦7月7日に行うものであり、お盆直前の行事であった。新暦では、梅雨の季節となり、天の川を眺めるには不向きな時期にあたる。なお、京都では旧暦7月7日にあたる8月に「京の七夕」が市内各地で行われ、いまでは夏の風物詩として定着している。

2 生活の変化と年中行事

生活の洋式化などライフスタイルの変化は、年中行事の有り様に影響を与えている。

例えば、町家では、旧暦の6月1日に建具替えを行う風習がある。建具替えとは、身の厄や災いを祓う夏越の祓の一環として、住まいの塵や埃を清め、建具は夏用の^{よしど}芦戸に変えることであり、軒先に^{すだれ}簾や^{よしず}葦簀を吊るし、座敷には^{とうざん}籐筵を敷き詰めるなどして、夏のしつらえに整える。しかし、町家が現代的な建築物に変わっていくのに伴い、年中行事としての建具替えも減少している。

また、毎年8月中旬から下旬にかけて京都の各町内で行われる地蔵盆は、子どもの減少や職住分離をはじめとする生活様式の変化などにより、行事自体が簡略化・衰退しているところも増えてきている。社会の変化によって年中行事の有り様が大きく影響を受けている例と言える。

私たちの生活を支える産業と年中行事の結びつきも強い。

例えば、年末になると京都の店舗には、正月の雑煮をつくるための白味噌や丸餅が所狭しと並び、6月には菓子屋の店頭の水無月が、夏越の祓の時季を告げる。地域特有の行事で用いる食物や用具類は、その地域の店舗が特別に誂えている場合も少なくない。

また、産業面の需要から変化する年中行事もある。京都発祥ではないが、節分に恵方巻きを食べる風習は、産業界が仕掛けた節分の行事として有名である。京都では、鴨川の納涼床が一例で、江戸時代には、祇園祭の先の神輿洗いの翌日から後の神輿洗いの前日まで（旧暦6月1日から17日まで）という制限があった。これは、その間は神が不在のため、川床で飲食してもいいという考えが背景となっているが、いまでは、観光客のニーズの高まりもあり、5月から9月まで設けられている。

季節とともに一年を彩る年中行事は、人々の暮らしに寄り添いながら時代とともに変遷しているのである。

(参考) 【暮らしの中で継承していきたい年中行事の例】

項目	例
一年を締めくくり，新年を迎える	大晦日（をけら詣り，除夜の鐘） 正月（白味噌丸餅の雑煮，根引きの松，初詣） 終い縁日，初縁日 事納め，事始め
五節句に由来する	人日（七草粥） 上巳（ひな人形） 端午（菖蒲酒，菖蒲湯，五月人形） 七夕（梶の葉に歌を書く，笹）
二十四節気，雑節に由来する	節分（豆蒔き，柊鯛），冬至（かぼちやを食べる）
子どもの健やかな成長を祈る	七五三，十三まいり，成人式，地藏盆（大日盆）
災厄の除去を祈る	愛宕千日詣（護符は台所に貼る） 玄猪（亥の子餅，囲炉裏や炬燵に火を入れる）
先祖を供養する	盆（迎え火，五山送り火）
罪や穢れを除き去る	夏越の祓（水無月）
五穀豊穰を祈り，感謝する	お火焚き
地域の絆を深める	区民運動会
その他	建具替え，衣替え

普及啓発冊子「京の年中行事」(案)

【仕様】 A4版カラー，約50頁

【内容】

(p 1～3) 表題，目次

(p 4～5) 「京都をつなぐ無形文化遺産制度」の紹介

- ・ 制度趣旨
- ・ これまでの選定の紹介
(食文化，花街の文化，地蔵盆，きもの文化，菓子文化)

(p 6～10) 京の年中行事 選定文

(p 11～37) 京の年中行事例の紹介

項目	例
一年を締めくくり，新年を迎える	年末：終い縁日，をけら詣り，除夜の鐘 年始：お正月，初詣，初縁日 事納めから事始め
五節句に由来する	人日（七草粥），上巳（ひな祭り），端午，七夕，重陽
二十四節気，雑節に由来する	立春と節分，追儺式，冬至（かぼちゃ供養）
子どもの健やかな成長を祈る	七五三，十三まいり，成人式，地蔵盆（大日盆）
災厄の除去を祈る	祇園祭，愛宕千日詣，玄猪
先祖を供養する	お盆，お精霊さん，迎え鐘，六道まいり，五山送り火
罪やケガレを除き去る	夏越の祓，年越しの祓
五穀豊穡を祈り，感謝する	春：葵祭，御田祭 秋：お火焚き，ずいき祭，新嘗祭，観月祭

地域の絆を深める	時代祭，区民運動会
その他	建具替え，陶器まつり，献茶祭

これらの例はごく一部に過ぎず，他にも多種多様な行事が営まれているほか，地域，家庭により独自の伝統を継いでいる行事も少なくない。

(p 38～39) 京の年中行事に係る市民アンケートの結果

(p 40～45) 京の年中行事カレンダー

(p 46～47) おわりに

<選定までのスケジュール>

平成 29 年	6 月 5 日～8 月 31 日	市民アンケート実施
	8 月 17 日	第 1 回審査会
	10 月 31 日	第 2 回審査会
	12 月以降	第 3 回審査会
平成 30 年	1 月以降	審査会から市長へ答申
		京都をつなぐ無形文化遺産に選定
	2 月以降	普及啓発冊子発行

第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の年中行事」審査会摘録

日 時：平成29年8月17日（木）10時00分～12時00分

場 所：職員会館かもがわ大会議室

出 席：柿野欽吾委員長，山路興造副委員長，太田達委員，杉本歌子委員，鈴鹿可奈子委員，筑摩寿委員，宗田好史委員，若村亮委員，山口壮八オブザーバー

1. 開 会

2. 挨拶

（略）

3. 制度説明（事務局）

資料：“京都をつなぐ無形文化遺産”制度の趣旨，第1回審査会の論点，「京の年中行事に関する」アンケート，「京の年中行事」の選定にあたって（ポイント），行事選定内容

参考資料：市民への年中行事アンケートの中間結果，選定冊子のイメージ

4. 議 事

柿野委員長：これまで5つの京都をつなぐ無形文化遺産を選定してきたが，「京の年中行事」に大きく関連しており，今回は集大成ともいえる。委員のみなさまには活発なご意見を賜り，良い答申を作りたい。

（市民への訴え，京都の独自性について）

山路委員：これまで5つの京都をつなぐ無形文化遺産を選定してきたが，最も重要なのは京都市民が京都という土地が育ててきた，生活の中の重要な無形遺産であるということを知覚してもらうこと。他所の土地にはない，京都の独自のものであるということを知っていて欲しい。例えば，「おぼんざい」という言葉は本来，京都の人達は使っていなかったが今は一般化してしまっている。京都が育ててきた独自の文化をしっかりと認識しておかないとどんどん「外来語」に侵食されてしまうのでは。

（京都の言葉について）

山路委員：年中行事の読みは「ねんちゅう」なのか「ねんじゅう」なのか。

宗田委員：京都生まれの人も言葉を変える。年配の方とそのお嬢さんでもう違う言葉を使っているということもある。親子で論争になる。

（旧暦・新暦について）

山路委員：明治6年に旧暦から新暦に暦が変わったことが、京都の年中行事を大きく変化させた基本的な要因。それまで季節の移ろいに合わせて年中行事を行っていたものが、西洋暦（新暦）に変わって以降、どういう形で従来のように季節と行事を合せていくかという葛藤が生まれ、それが100年くらい続いたと思う。最終的にいろいろなかたち、一月遅れや数字が重要なものは旧暦でも新暦でも数字に合わせて行なうなど、いろいろな工夫を重ねた結果が現在の年中行事だ。年中行事というのは、古くから京都というまちの旧暦で行われていた行事。例えば、大文字送り火は本来は旧暦の7月16日に行なわれていた。大文字と同時に東山に十六夜いざよい月つきが出るというものだったが、今は一月遅れなので東山に十六夜月が出ることはない。そういった一月遅れにしたことによって本来の意味や意図が変わってしまったものももちろんある。

無形というものは時代とともに形が変わるものだから変わっていく過程において古くからのしきたりや季節の移ろいという実感のともなう事柄をどのように考えていくかが大事。

（京都の独自性とエリア・地域について）

山路委員：年中行事というのは基本的には全国同じレベルであったもの。そのなかで都のあった京都という所の独自の年中行事は何なのかということを考える必要がある。かつて都があった所で庶民が育ててきた年中行事を守っていくということが、我々の使命である。

太田委員：「京の」ということの意義づけということについても考えていかなければならないし、京都市というエリアについて考えた場合、例えば、地藏盆についても山科と市内では違う。最終的に京北、山科、伏見などについてエリアの問題が鮮明に分かる、見られる図式のようなものをパンフレット化する必要があるのでは。また、お寺さんのお祭りなども個々に挙がっているが、対応として仔細な検討を入れていいのか。

北村局長：もともと選定したときに、全て頭に「京」とつけてきたのは、できるだけ京都での無形文化遺産ということを京都住民の皆さんに意識していただく、かつ自分たちの生活の中に入れてほしいという願いからのこと。エリアのことは十分意識したほうがいいと思うが、そこにあまり正確性を求めると議論が違ってしまう。そのため、何か大きな傾向として、エリアを明示するということが可能な範囲でやっていただければ。

土橋部長：京都で一般的に行われている行事というものが中心にあったとして、それぞ

れの地域で行われていることがあれば、別のかたちで紹介していくというようにしたほうが良いのでは。

山路副委員長：この前、剣鉾祭の調査をした。剣鉾祭というのは、基本的には京都のものである。それ以外に、江戸にも伝播しているし、鹿児島や丹波、丹後にもあることは分かっている。結局それは京都の剣鉾祭が他の地域に伝播したのであり、だから剣鉾祭というのは、あくまでも京都の祭りであるということが言える。京都発祥、京都から始まっているものであれば、全国に流布していても、それは京都のお祭りではないか。例えば、3月3日、女子の節句として雛祭が出ている。祭というのは、全国どこでもやっているが、関東雛と京雛とは並べ方が違う。京都独自にやっているこの並び方は、京雛という京都の特色。ところが、関東雛がもっぱら全国区になっていて比べて関東式の男雛、女雛が全国区になっていく。でもそれはやはり京都の無形民俗のかかわりなので京都としては死守したいという想いがある。

(行事の取り上げ方・まとめ方について)

杉本委員：事務局で細かく取り上げている行事や食べ物だが、個々に取り上げる必要があるのか。一つを取り上げて、ほかの行事はなぜ取り上げられないのか。それは京都ではないのかということになる。

あまり京都というように限定してしまうと、どこまでが京都かという線引きや枠づけということから始めなければいけなくなる。無形文化というのは、時代とともに移ろうていかねば続いていかない文化だが、形がないと本当になくなってしまう。では、どのかたちを無形の文化の行いとして残したいのかということを見ると、行事一つ一つを出すのではなく、もう少し大きく「年中行事、季節の行いとは、こういう意味合いで進めていきたいですね」という提案のかたちにとどめたほうが、より多くの方の共感と理解を得られるのではないか。

鈴鹿委員：いろいろな神社やお寺さんの名前もあるが、では、このお寺さんの行事は取り上げられていて、ここのお寺さんのものは小さいから入らないということがたくさんある。先に挙げた例のお雛様だと、京都独自の並びには、太陽が上がる方にまず天子様がいらっしゃって、奥様はその後という意味がある。その意味を分かっていたら並びを間違えることもない。理由を説明する方が大事ではないか。京都の行事は、大きく公家の行事と庶民の行事に分かれている。日の決まってる公家の行事から庶民の行事に広がっていったことによっ

ていろいろな日が派生していった。

柿野委員長：源がどこかということで仕分けして年中行事をまとめるのも一つのやり方。あるいは目的，例えば子供の健康を祈るような年中行事という目的でくくるというやり方をする，あるいは，京都だけではなくて全国的にやられているものについても，京都でしっかり行われているものを書いて，月ごとにまとめるというやり方をするのか，そのあたり，どういうまとめ方をするのか。メインを別のまとめ方にすれば，月ごとにカレンダー形式でまとめて参考資料として挙げるというのも一つの方法。

鈴鹿委員：京都の年中行事というのは，京都のものなのか日本のものなのかについて判別していくことが，すごく難しいが，最終的には京都の皆さんが，それをしないとすっきりしないというのが年中行事なのでは。

(取り上げる行事について-節分・ひな祭り・七夕について)

鈴鹿委員：例えば2月の節分。鬼や豆まきなどは京都に限らず，どこでもしているが，^{ついなしき}追儺式がないのは京都という観点から見るとおかしい。11月の^{にいなめさい}新嘗祭や8月の^{きっこうでん}乞巧奠など，そういう京都らしいものが入っていないことが結構ある。

山路副委員長：七夕は今は「笹の葉さらさら」が全国的だが，江戸時代の京都の七夕は基本的に梶の葉。梶の葉に歌を書いて吊るすというのが江戸時代の七夕だった。未だに梶の葉に歌を書いてきちんと奉納しているところが何カ所がある。

鈴鹿委員：今でもお花屋さんが七夕になると梶の葉を持ってきてくれてうちでも梶の葉に書く。やはり友人の家でも書いたと言っているし，残ってはいる。「元々は笹ではなく梶の葉なのですよ」というような内容を取り上げるべき。料亭に行くとき七夕のしつらえなので梶の葉の料理が出てくるが，京都の人が見ても「なぜ梶なんだろう，そもそもこの葉っぱは何だろう」というふうに終わってしまうのは，皆さんをお迎えしたときに少し恥ずかしい。

太田委員：京都の中で，お茶をやっている人間は昔から梶の葉。旧暦の感覚だと雛人形は4月に出し，3月3日以前にひな人形を出したらいけないと思ってる。それで，他府県から来た人が「なんで？」「娘さん大丈夫？」などと口をそろえて言うが，それでも4月3日まで出している。^{ひちぎり}引千切というお菓子もデパートは3月に作れというけれども，本来は4月であるとずっと拒否している。そういうことが京都らしいのかなと思う。節分も，京都の者は，四つ辻に行って，豆をほかすということをやっていた。

山路副委員長：僕の聞いた話では，半紙に歳の数の豆を入れて置いてあった。

太田委員：北の子は必ず深泥池にほかしに行く。今はテニスコートになっているところに、豆塚と言ったら、あそこにほかすのが、だいたい北山通より上の人がすること。

山路副委員長：それは節分の厄落としの話であって、「鬼は外」の豆まきと違う。

太田委員：京都の北の人間が節分で思い浮かべるイメージは、豆をほかしに行くことは、今言われた厄落としのことである。

杉本委員：ただ、そこまですると京都検定のように、「こちらは正しい行いですが、こちらは正しくない」ということになる。京都検定のように「○」「×」というような二元的なくくりで京都市民の暮らしが取り上げられると、他所から来た人の方が京都を活字で勉強していることもある。「間違えたことをしている、これが正しい」「京都の人はこうするんじゃないかと思ったけれども、そんなこともするのか」というような、いちいちそういうことになってしまう。

(冊子のまとめ方について—行事のくくり方)

杉本委員：例えば、京都の人は子供の成長を願うときにはこういった願い事を、こういうふうな行いをする人が多いというような、少し語尾を和らげるような工夫が必要。わけを説明すると納得して理解しやすくなる。一つの行いには訳がある、その訳があるからずっと続いてきた。世の中のかたちはいくらかでも変わる。だが、無形な部分、形を作らんとする核の部分、つまりその訳を、きちんとおさえる必要がある。そうすると個々の行事を限定するよりかは、もっと大きくりにしたほうが分かりやすいように思う。

柿野委員長：旧暦から新暦へ切りかえ、これにともなってどんな問題が起こっているのかについてや、女雛、男雛もコラム的にこんなことだと紹介することなどがよい。

鈴鹿委員：大きな枠でいくという概念が今なくなってきていて、例えば、「2月頃でしたら新年を迎えるからこういうことをするのですよ」とか、そういうざっくりしたものを。

「昔は夏に疫病などが流行る季節で忌むべき季節だったから、だからこそこういうお祭りをして神様をお慰めしていたんですよ」というようなことを言えば、全部を包括できるし意味も分かりやすいのかなと思う。何かそういうざっくりとした、季節についても昔の人々が触れていた感覚というものが伝われば、年中行事のことも分かりやすくなる。

柿野委員長：背景や考え方などそういうことも入れて例示としてこのようなものがある

ということは示していったほうがいい。

(京都の文化・歴史について)

山路副委員長：今、京都の歴史と文化は、他所から乗っ取られていっている。というのは、京都の人たちが声を出さないから。結局、東京などの外部から、会社や団体の方々が連れてきて、一方的に全部解説をする。それは本当の意味で「京都の人たち」が聞いたらやはり忸怩たる思いのある解説だ。しかし、そこは違うと思っけていても、京都の人はわりと何も言わない。そこも含めて、これまでの伝統について、「京都ではこうだったんだよ」ということを、やはり京都の人たちにきちんと発信してほしい。これは別に無形のことについてだけではなくて、有形や歴史についてもテレビや小説で、いろいろなもので作られてしまっている。それに京都の観光は乗っ取られ気味だと思う。京都のほんまもんって、京都の人たちが伝えてきたものを、「実はこうです、本当はこうなんですよ」ということを声を大きくしてちゃんと言っておきたい。一つの例を挙げると、四条大橋のたもとに阿国の像が建っている。四条河原で阿国が歌舞伎踊りをやったというのは有吉佐和子の作品以降。資料上、北野神社境内でしかやっていない。でも、有吉佐和子が四条河原で歌舞伎踊りをやったと小説に書いて、テレビがそう伝えると、あそこに京都の人たちが銅像を作った。南座に、歌舞伎発祥の地という小さいものがあるが、あれは、高橋誠一郎という人が、本当は北野神社の中に建てたかったのに、北野神社に断られて、仕方なく南座の横に建てたという研究発表がある。だが、いつの間にか観光客も全ての京都の人たちも、阿国は歌舞伎踊りをあそこで初めてやったのだという、うその京都がつくられてしまっている。やはり京都がやってきた年中行事はこうなのだということを、声を大きくしてこういう何かで言わないと、分かってもらえない。

(衰退した行事、変化していった行事、各家での差異について)

山路副委員長：正月の恵方棚のように今ではなくなってしまった行事も非常に多い。そういうものは時代の流れだから、復活しろとは言わないが、やはりうその伝承はしてほしくない。例えば、お火焚。まだ少し残っているが、僕が京都に来た40年前はまだ普通に行われていた。それがほとんど無くなった。お火焚というのは、本来はいつやるかという、実は冬至の前後。だから、この一覧表で見ると冬至は12月に書いてあってお火焚は11月に書いてあるという分裂が起こっている。

杉本委員：京都の人という大きなくくりの中でも、一つの行事をしないお家もあるし、やるお家もある。例えば、うちは浄土真宗なので神さんごとを一切しないので、門松も立てないし、をけら火も祇園さんにもらいに行かないし、飾りかまどもないし、恵方棚もない。線引きはかなり難しい部分もあるので、選定というものには、時間をかける必要もある。

鈴鹿委員：具体的になればなるほど難しい。特に京都のお雑煮といっても、白味噌というだけで、お家によって全部違う。

山路副委員長：京都の町家のあり方というのは、すっかり変わってきている。基本的には家の中に主人がいて、女中さんや男衆がいた。季節ごとのいろいろなもの、部屋を夏になったから一切変えるといったことは、そういう人たちが全部してくれていた。今はその働き手が全然おらず、京の町家だけが残っていて、しつらえを変えろといっても大変なお金のかかることで、現実的にはなかなか難しい。家族構成や働き手、男衆さんたちがいないという現実の中で、いろいろな行事ができなくなってきました。

それからもう一つ、打ち水、門に水を撒いて涼しくしている。あれを復活しようということを市長がよく言っているが、江戸時代において道路というものは、向こう三軒両隣で1町をなして、自分たち町のもの、共同体のものだった。それでお互いがやって全体が涼しくなるという風物があったのに今の道路というのは、市道だったり県道だったり、自分たちのものではなくなっている。そのため、「そんなところにいちいち打ち水などをするのか」という話になり、結局、社会の仕組み自体が古いものを伝えていく仕組みでなくなっている。

(受け継ぐことの必要性について)

筑摩委員：この冊子を見はるのは普通のお家の方が多いと思う。そうした場合に、この8月のお精霊さんのことなどが気になる。「五山、五山」（五山の送り火）と言って送ることは結構あるが、お精霊さんの話はあまり前面に出ない。私は父から受け継いできて、お精霊さんの鐘もつきに行かないと駄目だという想いがあるし、私の子供は、私が行っているからそのことが分かる。だが、その次の子はどうやって分かってくれるのかなということも気になる。京都に住んでいたら、受け継いでいく必要がある。そのためにも若い子に分かりやすい、普通の京都の行事について説明を入れながら教えてあげるといった必要がある。「そうや、お母さんがしてはった」というような、思い出させることができるような説明を少し入れてはどうか。

(季節感について)

若村委員：年中行事は非常に季節感がある。今の暑い季節に秋の豊作を思ったり、秋の豊作からまた冬の厳しさを感じたりと、過ぎ去る季節への感謝とこれから迎える季節への願いという日本人が持ってきた精神世界が形となったのが年中行事だ。今、生活の中で季節感というものがなくなっている。しっかり認識できるようなことをきちんと伝えていかないと、一年中同じことをやって同じものを食べて、という感覚だけになる。その季節ごとに何があつてと、理由をしっかり伝えないと価値は分からない。なぜその年中行事をやるのかとか、なぜそういうお飾りをするのか。今までは京都の人は当たり前に行ってきたことを次の世代にも伝える必要がある。

山路副委員長：現状、季節の移ろいというものを今の生活の中で感じられるものは何か、京都らしいものが何であるか。そういうものをピックアップして、きちんと解説を載せて、そのようなパンフレットを出してみんなに分かってもらう。「歴史的にはこうなんだ。社会構造がこうだったからこれでできたんだよ」と。メッセージのある冊子は作っておきたい。

柿野委員長：神社の行事は新暦にあわせて行われている。そのため、田植え関係の神事などは既に田植えが終わって田んぼがそれなりに大きくなったころに行事をする。そうすると感覚的に違うとは思う。

山路副委員長：例えば祇園祭は7月30日にやっているから、ひと月遅れだ。

太田委員：もともとは文献上、6月17日。北野天満宮はこのごろ行事を全部、新旧暦を合わせようとされている。

山路副委員長：京都市も8月に入ってから七夕まつりをやっている。

(京都限定の行事について)

太田委員：京都全体として他府県に対して、これは年中行事だと言える行事がさまざまある。十三参りは、地藏盆と同じくらい単独に選定すべきものではないかと話したことがある。女の子が全部13歳で振袖を作って袖を上げて、20歳で下ろすというのは、北摂から京都だけしかしないことではないか。それから、どこで振り返ったということを必ず言い合いになる。京都の方だったら経験されたと思うが、渡月橋を振り返らずに渡るというものがあるし、これは独特だと思う。

愛宕の千日詣は、ここが本家だし、周辺の行事も全部続いている。愛宕講という講社の問題も京都全域で出てくる。さらに、大日が上がっていない。27

日に地蔵盆のようなことをしている所は、京都市内に結構ある。この大日というのも京都盆地特有のものかなという気がする。

それから、やはり京都というところでお茶。祇園さんの献茶と北野さんの献茶というのは外せないのでは。献茶の始まったのが北野ですし、四家元に二宗匠という、回してやっている、献茶の始まりのものであって、京都の1,000人ぐらいの方が動かれる。

(新しい行事について)

太田委員：鈴鹿さんがされている洛趣会というのがある。京都の人が約5,000~6,000人は来る。これだけ集まって京都の人が楽しみにしている行事というものも入れていく必要があるのでは。定番化して50年以上続いているような行事も入れていく必要がある。京北町も含めていくと講社の問題も、まだ残っている講はあるような気がする。それから川床も年中行事化している。

山路副委員長：川床というものも、初めて京都に来たときは7月にならないとやらなかった。初めの神輿洗が終わらないと床は張らず、あとの神輿洗の前日に終わっていたものが、今だと5月からどんどんやられるようになった。本当は、鴨川の神様が八坂神社に行っている間、留守の間だけ人々が鴨川に床を張って飲食ができたというもの。本来はこうなのだという話を京都人としてはきちんとしておくべき。

鈴鹿委員：6月になると、今、京都では川床が楽しめますというのがあって、豆知識として、もともとこういう意味があっただけで出ていましたよということを説明していけばいいのでは。京都らしいものを感じたいなという方や、京都に住んでいる方やこれから住むもとしている方などが、自分たちも京都の暮らしをしたいなというときに開いて、「ああ堅苦しい」と思われてしまったら、敬遠されてしまう。軸としてあるのが柔らかく豆知識で、京都の人も「あっ、これ知らなかった」というようなのが入っているというのが、一番面白い人たち。

山路副委員長：五山の送り火は、あれは京都のまちの祭りではなく、あくまでも周辺の村々の行事。東北でも行なっているが五山ばかり有名になってしまっている。あれは京都の人たちは、見せてもらうというか、利用させてもらっているだけで、実際にやっているのは、各村。

太田委員：お祭りで言うと、三大祭りもここに組みこんでしまえば。祇園祭はいろいろな行事の積み重ねがあっただけということを、そこでしっかりと説明できる。それから、時代祭は京都独特でしょう。町内、町組の祭りだということを書いてお

きたい。

山路副委員長：時代祭は明治28年につくられた祭り。それも京都市全域の学区ごとに1日1,000両というお金を集めて、そして平安神宮を京都全域の氏神様とした。そのため平安神宮に宮参りに行っていいし、ゆえに結婚式場もある。京都全域の氏神になったというのは、一つの新しいやり方。まだ百何年しかたっていないが。作られた年中行事というのは、地元や一般の民衆の人たちがそれを取り入れないと消えていく。皇服茶も取り入れられたし、最近でいちばんよく取り入れられたのがバレンタインデーのチョコレート。京都独自のものではないが。だから、年中行事というのは作られたものがたくさんある。受け入れられるなら需要があったということ。

太田委員：今、言われた理論でいくと、花びら餅というのは元々裏千家だけのものだった。だけど、今はどこでも売っているが、これを載せたら駄目だろう、という気はする。

山路副委員長：宮中に差し上げるから、一般民衆も食べたというのもあるので、本当に宮廷行事。ごぼうと白味噌で京都らしい感じがする。

太田委員：例えば七福神の毘沙門天が東寺になっているが、こうなったのは京阪バスが回るようになったから。山科の毘沙門堂の道路にはバスが入れないので、東寺の会館で昼ご飯を食べさせるシステムができてから、この東寺が入ってきたという理由。この七福神は3パターンあると思う。歩いて行けるところから、だんだんエリアが、うちもうちもと言いつつ出てきたものも含めて考えていかないと、これを京都市が載せてしまうとまずいような気がする。

柿野委員長：五条坂の陶器祭りというのはいつからなのか。

山路副委員長：基本的にお盆のころ、珍皇寺さんのお迎えにいった客を相手に販売しだしたのが始まり。清水さんの千日詣もあるからその人たちを相手に端物を売るようになった。

太田委員：何年やっているかという問題はある。ただ、今の京都の人は楽しみにみんな行っていると思う。

鈴鹿委員：陶器市というと「あっ、もうすぐ陶器市だ」という話が上がってくる。やはり年中行事なのかなと思う。

山路副委員長：正月の蹴鞠はじめは新しいだろう。

太田委員：今から25年前、私が中学1年のときくらいに下鴨神社で始まった。流鏝馬も今から30年前ころから始まった。下鴨神社の行事は上賀茂神社を通じて、新しいので、後から作られたという系統が多い。

柿野委員長：縁日とかなら、下鴨の古本市がある。私は好きだから毎年みるが、これもいつ始まったのか、百万遍もある。意外とそういう縁日は京都は多い。最近だと手作り市とか、わりと若い人にも人気がある。新しい動き。

(宗教との関係性)

太田委員：氏子、氏神から檀家、檀那の関係もちょっと触れると面白い。

この前調べたのだが、日蓮宗はいまだにおはぎを家で作っている率が異常に高く日蓮において、おはぎはホーリーフードになっている。また梅干しを漬けている率も曹洞宗がとて高い。私は北の人間なので、浄土真宗さんとは全然なじみがない世界。だから、時々お話を聞くと檀家、檀那の違いがわかって面白い。京都人と一つにくくれるけれども、実はくくれていない。氏子、氏神っていうのも、大きく分けたら昔からの神輿のあるエリア、例えば松尾なんて異常に巨大な世界で、右京区、嵐山も実は松尾神社の氏子だし、細かい年中行事に祭りを入れると細かいクレームが来にくくなるかなど。

山路副委員長：皇服茶というのは神社によって全部漢字を変える。あの行事は、本当にいつごろから始まったのか。

山路副委員長：基本的には縁日。例えば天神さんの縁日、東寺さんの縁日という、この縁日にお店が出るというのは、これはもう昔からのこと。

太田委員：天神さんと弘法さんを初天神、初弘法を入れるのか、終い天神、終い弘法を入れるのかとかいろいろある。

杉本委員：縁日との関わりを分かっている人は、もしかしたら若い方の方には少ないかもしれない。だから、歴史を知らせてあげるといのはすごく年中行事の行いを考える上では大事。

鈴鹿委員：縁日で来ているからちょっと手を合わせて帰ろうかという気持ちにつながっていくかもしれない。

(オブザーバーからの御意見・御感想など)

山口オブザーバー：今日はありがとうございました。非常に難しい、やはり歴史とか地理とかいうことを考えるとどんどん難しくなっていくというのが正直な感想。文化庁の文化基本振興局というのができて、生活文化というのを文化庁が力を入れてやっけていこうとしている。今までは文化財であるとか音楽であるとか、そういうものに力を入れていたが、生活文化をやっけていこうと。生活文化というと法律用語で非常に堅いが、我々、暮らしの文化というような捉え

方でいろいろとできないかなというのを考えている。今回、京都市の無形文化遺産という取り組みをされていると、非常に参考になると思っているので、これからもいろいろなご意見を聞かせていただければと思う。本当に今日はありがとうございました。

柿野委員長：それでは、議論ありがとうございました。

(了)